

いつの日も明日があるわけではない

今を精一杯生き抜く

人間の劣等感や様々なひずみは、よく弱者に向かつていきます。このよ
うなことは特にバブルがはじけ、不景気になってきた一九九〇年ころより顕
著になってきたようです。好景気の頃は隠されてきたものが、不景気とと
もに噴き出しているようです。努力すれば報われる社会は好景気の頃でし
た。今はどんなに努力しても、リストラ、倒産、そして家庭崩壊等、生
きづらい世の中です。しかも努力しても結果が出なければ努力とは呼ばな
い社会なのです。結果が出ない努力もこの社会にはあるのです。

あるプロ野球の投手がいつています。【ピンチの時内野手が集まって「がんばれ」と声をかけられると、俺は精一杯がんばっていると言つてやりたい】と。努力が報われる社会も大切ですが、努力を認める社会であれば、まだ救いがあり、よいと思うのですが……

新制作座という劇団で一九五三年の初演より今もロングランの全国公演が
続いている演劇で「泥かぶら」というのがあります。「泥かぶら」とは主人
公の女の子のあだ名です。

《昔ある村に、みなしごの女
子がおりました。あまりにも身
なりが汚く、顔も泥で汚れてお
りましたので村の子供たちがから
かい「泥かぶら」と呼んで、唾を
吐きかけたり、石を投げたりいじ
めておりました。しかしこの「泥
かぶら」の女の子も負けず嫌いで
気が強く、村の子供に仕返しを

します。そうしますとますます孤立化してしまい、ひとりぼっちになつ
てしまいます。

そして「自分はこれからどうしたらいいのか」夕日を見ながら悲し
くなり考え込んでしまいます。そこに一人の僧が通りかかり次の言葉
を与えます。

「二つのことを守れば村一番の美人になれる。それは自分の顔を恥
じないこと、どんなときにもニツクリ笑うこと、そして他人の身になつ
て思うことだ」と。

その後この「泥かぶらは」この約束を守り通して生きていきます。

庄屋の子が父親の大事にしている茶器を割ったのを自分が割ったと助け
てあげたり、ひと買いに売られる女の子の身代わりになったりと、犠
牲的な行為をいやな顔ひとつせず為していきます。いよいよ都に売ら
れて行く道すがら、何の屈託もなく「何を見ても素晴らしいし、何
を食べてもおいしい」と無邪気という泥かぶらに、ひと買いの次郎兵衛
はいたたまれなくなり、詫び状を残して逃げてしまいます。

その詫び状には『おまえのおかげで、私の体の中にあつた仏心が目
覚めた。泥かぶらよ、おまえは仏の子だ。幸せになつてくれよ』とあ
りました。このときから泥かぶらの泥は金泥に変

じたと言うことです」

こんな「泥かぶら」に本当の美しさ優しさを思
います。そして他人の心を突き動かすものが何で
あるのかを教えられることです。

今を精一杯生きる大切さ、そして尊さを思い
ます。人間の感動の原点はこのようなことなので
す。

仏の願いにそつと耳を傾けてみませんか。

